

母語干渉と習得プロセス

— 破裂音習得から見た中間言語構築 —

福 岡 昌 子

Interference and Developmental Process: Creating an Interlanguage Through Acquisition of Plosives

FUKUOKA Masako

〈Abstract〉

Further experimental studies will be needed on what processes are used or developed to create an interlanguage when second-language learners acquire Japanese-language phonology. The perspective of the interrelationship of a developmental process seen during the course of learning with first-language interference (negative transfer) is examined in this paper; furthermore, it analyses how second-language learners develop an interlanguage in Japanese-language phonology, with focus on the plosives of the Japanese language that Chinese learners tend to find difficult to master.

キーワード：中間言語、言語習得モデル、習得プロセス、母語干渉（負の転移）、破裂音

1. はじめに

Echman (1977, 1981) の有標性弁別仮説 (Markedness Differential Hypothesis) は、有標性の概念を対照分析 (contrastive analysis) と組み合わせ、第2言語習得における難易度を予測したことで、第2言語学習者の音声面における中間言語の構築過程を明らかにした。また、Flege, J.E. (1980) は、アラビア語話者が英語の音声習得する際に、母語の破裂音の VOT (voice onset time) の値から徐々に目標言語の値へ近づいていく過程を、中間言語への「近似化 (approximation)」の現象として報告した。また、本研究で言及する Major (1987) は、「母語干渉 (負の転移: negative transfer)」と、「近似化」などの「中間言語の発達を促す習得プロセス (developmental processes)」との相互作用から中間言語の発達過程を考察し、第2言語習得モデルを提示している。第2言語学習者が、日本語の音声習得するにあたって、どのような「習得プロセス」を経て、或いは出現させて中間言語を構築していくのかについては、今後も多くの実証研究が必要とされている。

本研究では、中国人学習者が日本語の音声の習得で難しいとされる破裂音の習得を一例に挙げ、「母語干渉」と「習得プロセス」という視点から、第 2 言語学習者の中間言語の構築過程について考察する⁽¹⁾。

2. 音声・音韻の中間言語研究 (国外) と習得のプロセス

音声・音韻の第 2 言語習得研究から、(1)中間言語研究の動向、(2)中間言語を構築する習得のプロセスについて指摘した主な国外の第 2 言語習得研究の動向を概観する。

2-1. 中間言語研究の概観

1950、60 年代に音韻論で成果を上げた対照分析も、1960 年代後半から 1970 年代になると、習得上の困難が予測される点について「母語干渉 (interference)」、または「負の転移 (negative transfer)」だけでは説明が不十分となる。それに代わって、誤用は学習者が目標言語を学ぶ段階で学習者自身が立てた仮説を検証した結果であるとする、Corder (1967) による学習者の誤用分析 (error analysis) が、Nemser (1971) や Selinker (1972) によって支持され、中間言語研究の発展へと導いた。

中間言語 (interlanguage) は、Selinker (1972) によって提唱され、現在広く用いられている。その用語を巡って中間言語の捉え方の見解の相違から幾つかの議論が存在するが、その基本概念となるものは、Nemser (1971 : 116) によって明確にされた次の 3 点である。①学習者のある段階の発話は母語とも目標言語とも異なる体系を持つ、②その体系は初期の段階から目標言語に最も近い段階まで連続した発達体系を成している。③同じ発達段階にいる学習者の体系はほぼ一致している、というものである。この中間言語の連続した発達体系の本質については、学習者が第 1 言語習得と類似した方法で、徐々に目標言語の規則体系を創造する再創造連続体 (recreation continuum) としての見解 (Dulay and Burt [1977]) が一般に支持されている。

本研究では、Nemser (1971) の基本概念に従い、中間言語は、学習者が目標言語を習得する過程で、学習者がその段階ごとに形成する母語とも目標言語とも異なる独自の可変的な言語の体系であるとする。そして、学習者は様々な学習段階で、絶えず自己の仮説を検証し、目標言語に向かって規則を作り上げるという内的過程を経ているものとする。従って、学習者が発話した音声も、その習得段階における学習者の中間言語の音体系から発せられたものであると考える。

中間言語は、習得の過程では目標言語と比べまだ不十分な規則体系であるから、当然誤用が生じる。中間言語研究では、この学習者の生み出す様々な誤用の分析が重要となる。Selinker (1972 : 213-215) は、中間言語研究のための観察が可能なデータとして、①学

習者の母語の発話、②学習者の中間言語の発話、③目標言語の母語話者による目標言語の発話を挙げる。この3つの発話を比較し、学習者の言語体系を探ることで、中間言語における学習者の心理の理解および言語習得のプロセスに関する理論を構築できるとした。

このような学習者の誤用にに基づく中間言語研究の分析方法は、やがて Schachter and Celce-Murcia (1977: 422-449) によって、学習者の母語を問わず共通して現れる発達上の誤用 (developmental errors) を分析することの重要性が指摘される。それ以降、学習者の生み出す誤用と同時に、学習者に共通する言語習得のプロセスの存在にも焦点が置かれ、厳密なデータの解析が行われるようになった。中間言語研究の音声・音韻の領域は、中間言語音韻論 (interlanguage phonology) として発展し、次に述べるようなデータの分析に焦点をあてた研究成果⁽²⁾が報告されている。

2-2. 中間言語を構築する習得プロセスを指摘した主な第2言語習得研究

ここでは、中間言語を構築する習得プロセスについて指摘した主な国外の第2言語習得研究について紹介する⁽³⁾。

2-2-1. 分節音

まず、学習者の発話の誤りを対照分析ですべて予測できるものではないことを指摘し、中間言語音韻論を発展させるきっかけを作ったのは Brière (1966)、Johansson (1973) である。Johansson (1973) は Brière (1966) を発展させ、「母語からの転移のプロセス」以外に、「過剰般化 (overgeneralization)」および「近似化」のプロセスがあることを指摘した。母語の異なるアメリカ人とドイツ人には、スウェーデン語を習得していく過程でスウェーデン語の [u:] を [u] で発話しようとする過剰般化が見られることを示し、母語にない新しい音を習得するのが難しいのは、負の転移とは別に「目標音自体に備わっている難しさ (intrinsic difficulty)」が関係するからだを指摘した。「近似化」の習得プロセスについては、既に言及したように、Flege (1980) がアラビア語話者の英語の /p, t, k/, /b, d, g/ の音響分析を行い、第2言語学習者は発話した VOT が習得が進むにつれて、母語音と第2言語音の中間的値を示すようになり、それから徐々に第2言語音の基準に近づいていくことを指摘している。

Wode (1976) は、英語を第2言語とするドイツ語母語話者の子供およびドイツ語を第2言語とする英語母語話者の子供を被験者にして、第1言語と第2言語の発話データに関する縦断研究を行っている。幾つかの音韻には母語からの負の転移が見られるが、/r/ と /w/ の特に /r/ の獲得に関しては、母語の影響を受けずに「第1言語と同じプロセス」で第2言語を獲得していることを報告している。

第2言語音を習得するためのプロセスにおいて、学習者の発音の変化パターンにも規則性

があると指摘したのは Dickerson (1974) である。Dickerson (1974) は、英語を第2言語とする日本語話者の発話データを分析し、後続する母音が高母音か低母音かによって、また、第2言語の発話形態が、単語の読み>会話文の読み>自由会話の順に従って、発音が不正確になったと報告している。学習者の目標音の習得は、異なる音声環境の中で目標音に近い音が少しずつ増えていくことで、徐々に第2言語の音声の習得が行われていくことを指摘した。また、Celce-Murcia (1977) は、英語とフランス語を学ぶ子供の任意の発話データから、例えば「knife」等の摩擦音を含む語彙を避けて、摩擦音を含まない「couteau」等を発話するなど、対照分析や誤用分析では予測できない「回避 (avoidance) のプロセス」が使われることを発見した。

「はじめに」にでも述べたように、Echman (1977, 1981) の有標性弁別仮説 (Markedness Differential Hypothesis) も、第2言語習得研究における言語の習得順序と転移を説明する上で重要である。この仮説によれば、目標言語で学習が困難なのは、第1言語が無標で第2言語が有標である場合であるとし、有標性 (markedness) の概念を対照分析と組み合わせることで、第2言語における難易度を予測した。例えば、英語とドイツ語を比較すると、両言語とも語頭と語中には有声・無声の対立が見られるが、ドイツ語の語末には有声・無声の対立がない。このため、英語を学ぶドイツ語話者の方が、ドイツ語を学ぶ英語話者よりも語末の有声・無声の対立の習得が困難であることを予測した。

また、多くの研究が指摘しているように、母語話者と第2言語話者とは分節音の知覚に違いがある。Miyawaki et al. (1975) は、/r/ と /l/ の間の合成音声を作り、英語話者と日本語話者における英語の /r/~/l/ の範疇知覚 (categorical perception) の違いについて調べた。その結果、英語話者が、合成音声の刺激音が /r/ と /l/ のいずれかの音素の範疇に属すると判断できた一方で、日本語話者は範疇化できなかったことを報告する。また、Flege and Eefting (1986) は、英語話者とスペイン語話者を対象に、VOT の異なる /da/~/ta/ の範疇知覚を調べた。その結果、音素の境界が2言語話者の間で異なっていたことを報告している。

Flege (1992b : 572) によれば、第2言語音を知覚する際に新しい音 (new sound) が母語にない音であれば、同一音とみなされることはないが、母語に近い類似音 (similar sounds) の場合は母語音と同一音として使い続けられるとする。この例としては、Bohn and Flege (1990) の研究がある。Bohn and Flege (1990) は、ドイツ語話者の英語の音声知覚を分析し、第2言語学習者にとって新しい音として知覚する目標音 (英語) の母音 /æ/ の方が、母語音に似ている目標音 (英語の /i, I, ε/) よりも正確に範疇知覚を築き上げていたことを報告した。

Akabane-Yamada (1996) は、日本語話者の英語の /r/ と /l/ の音声知覚について指導の観点から第2言語習得研究を行っている点で注目される。即ち、英語の /r/ と /l/ の自然音声を用いた同定 (identification) 訓練を行い、その訓練効果により知覚や生成が可能になったことを明らかにしている。

2-2-2. 超分節音

これまでの研究の大半が分節音 (segment) に関するものであったが、今日では音節やリズムやイントネーションに関する研究も盛んに行われ始めている。

音節構造においては、Tarone (1972, 1976) が母語からの転移とは別のプロセスである語中音添加 (epenthesis) と音群縮小 (cluster reduction) の両方を使って、第2言語学習者による「CV (子音+母音) の音節パターンを発話する強い傾向」が第2言語学習者にあることを指摘し、音節構造の習得研究を発展させた。

リズム構造では、母語による転移のプロセスが指摘されている。リズム構造には、英語やドイツ語のような強勢拍リズム (stress-timed rhythm) とスペイン語や日本語のような音節拍リズム (syllable-timed rhythm) があるが、Flege and Bohn (1989) は、英語を学ぶスペイン語話者の “able” や “ability” といった単語におけるストレスの移行や母音の弱化 (reduction) の現象を調べた。その結果、ストレスがなく母音を弱化させた発話よりも、ストレスのある音節をストレスのない音節と正確に区別しながら発話する場合の方が成績がよかった。これは、母語にあるリズム構造からの正の転移 (positive transfer) が働いたケースであると報告した。

イントネーションの研究では、Backman (1977) が学習者にダイアログの入ったテープをリピートさせ、その発話データを分析している。学習者の発話はピッチレンジ (pitch range) がせまく、不適切なイントネーションで発話しており、「ピッチバリエーションの極端な高低を避けて発話する傾向」があることを指摘した。

第2言語学習者の音声・音韻の習得には、母語からの言語転移の影響が大きいとされるが、これらの研究は母語からの言語転移だけではなく、その他にも学習者に共通する「習得プロセス」が関係していることを指摘し、音声・音韻の中間言語研究を発展させた研究として重要である。また、最近の傾向として Tarone (1988) などの研究に見られるように、中間言語で起きる可変性 (variation) を様々な角度から捉えて、その可変性の中に系統性・法則性を見出していこうという方向にある。また、単にデータを記述し分析するだけに留まらず、第2言語習得理論として発展させていこうとする中間言語研究全体の傾向も明らかになる。

3. 中間言語を構築する「習得プロセス」と Major (1987) の第 2 言語習得モデル

3-1. 中間言語を構築する「習得プロセス」

Selinker (1972 : 216-221) は、中間言語では 5 つの主要なプロセスが習得上作用しており、これらの 5 つが一体となって学習者は目標言語の規則を内在化していくと述べる。①言語転移、②目標言語規則の過剰般化、③訓練の転移 (transfer of training)、④第 2 言語の学習の方略 (strategies of second language learning)、⑤第 2 言語の伝達の方略 (strategies of second language communication) である。中間言語を構築する際に行う仮説の検証は、学習者の潜在意識のレベルで行われることが多いとされる⁽⁴⁾。

本研究では、学習者が日本語の音声・音韻を習得していくにあたって、どのように中間言語が構築され、それが時間と共にどのように変化していくかについて破裂音習得の研究成果から考察を試みる。そのためのアプローチの方法として、学習者のデータの様々な誤用、正用の中に現れる、共通して発達する規則的な「習得プロセス」を中心に見ていくことにする。これらの「習得プロセス」は、学習者が目標言語の規則を習得し中間言語を発達させる過程で、学習者が仮説の検証を行って規則を作り上げていった、一連の内的過程を経た上で現れる言語発達の道筋を示すものである。学習者は、目標言語の規則のある決まった順序で習得していく場合もあれば、一定の規則的な発達のパターンをたどらない場合もある。しかし、学習者の系統的で規則的な言語発達の道筋を探ることで、学習者がどのように目標言語を習得しようとしているのかを理解することができるのである。以下、一般に漸進的な習得の実態を示す際の習得過程との違いを明確にするため、中間言語を構築する「習得プロセス」として捉え記述する。

音声・音韻の中間言語分析では、学習者の生み出す誤用の他に、「習得プロセス」とその言語要素を習得するまでの「習得プロセス」に関わる制約についても明らかにしようとしている。そして、下記に示すような「習得プロセス」が Tarone (1978 [=1987 : 79]) によって報告された。これは、これまでの代表的な習得研究の中から「習得プロセス」について指摘したものである。この中の幾つかの「習得プロセス」と制約については既に第 2 の節中の「」で示した。

- ① 「母語干渉 (負の転移)」(負の転移) (すべての研究)
- ② 第 1 言語獲得のプロセス…Wode (1976), Tarone (1972, 1976)
- ③ 過剰般化…Johansson (1973)
- ④ 近似化…Johansson (1973), Nemser (1971)
- ⑤ 回避…Celce-Murcia (1977)

* これらのプロセスは、次の制約 (constraints) を受ける。

- (⑥) 目標言語の中のある種の音自体が持つ本来の難しさと音韻論的な前後関係の配置から来る難しさ…Johansson (1973) による制約
- (⑦) 不必要な箇所を強く発話してしまう傾向…Johansson (1973)
- (⑧) CV パタンで調音する傾向…Tarone (1972, 1976)
- (⑨) ピッチバリエーションの極端な高低を避ける傾向…Backman (1977)
- (⑩) 感情および社会的制約…Dickerson (1974), Schmidt (1977)

これまでの第2言語習得研究で明らかになったことは、これらの「習得プロセス」が単独に学習者の中間言語を発達させることはなく、母語からの干渉と共にその他の「習得プロセス」とが複雑に影響し合っていることである。今後の研究ではその相互作用の本質を探ることが重要とされる⁽⁵⁾。

加えて、中間言語の習得順序規則に関わる言語の普遍性、有標性の概念、学習者の社会的・心理的要因を明らかにしながら、目標言語へと学習者が中間言語を発達させていく点についても、注意深く分析する必要がある。これは、学習者が第2言語を習得するにあたり、それまで既存の知識として持っていた言語の普遍的な要素を利用することも大いに考えられるからである。また、目標言語にある言語要素が母語にはなく、さらに、非常に稀で本来困難な要素を持っていた場合、どうしても習得が行われにくく、その言語要素だけが他の言語要素に比べ習得が遅くなることも大いに考えられるためである。そして、学習者を取り巻く環境や学習者自身の心理状態も言語の習得に何らかの影響を与えている可能性がある。

時間を追って学習者の「習得プロセス」における諸要因とその相互作用を見ていくことは、中間言語の発達パターンや学習者の目標言語の習得状況の把握、習得が困難な順位、具体的な学習者のストラテジーが解明できるばかりでなく、教室における学習者に対するその時点ごとの適切な指導、シラバスデザイン、教授法へと示唆を与えていくことができるので重要である。

3-2. Major (1987) の第2言語習得モデル

第2言語を獲得するための言語習得モデルには、研究者によって幾つかのモデルが提示されている。Flege (1995) の SLM モデル (Speech Learning Model)、Best (1995) の PAM モデル (Perceptual Assimilation Model) 等である。また、学習者の「習得プロセス」における諸要因の相互作用を見ていくという視点から、Major (1987) は第2言語習得モデル「The Ontogeny Model」を提示している。

Major (1987) の言語習得モデルは、学習者の中間言語の発達過程を、「母語干渉 (負の転移)」(interference processes) と「発達を促す習得プロセス」(developmental processes)

の影響力の変化で説明する。Major は、ブラジル人英語学習者が英語の /r/、語末子音群 (final consonant clusters)、語末の阻害音 (obstruents) を習得するにあたり、ポルトガル語の言語要素を代用すれば「母語干渉 (負の転移)」、英語の言語要素が観察されれば「発達を促す習得プロセス」としてその両者の関係を分析した。母語からの言語転移が第 1 に中間言語の形成に深く関わるものであるから、Major のように「母語干渉 (負の転移)」とその他の「発達を促す習得プロセス」との相互作用から、学習者の中間言語の発達する過程を明らかにした点は意義深い。

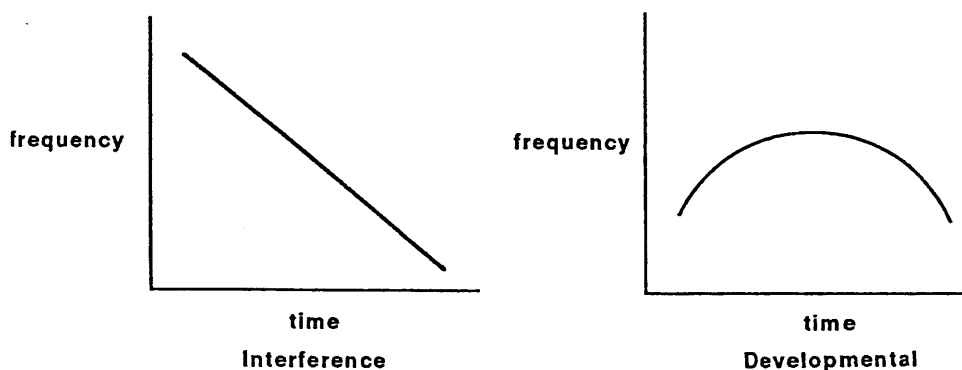


図 1. Relationship on interference and developmental processes to time (Major 1987 : 103)

このモデルによれば、図 1 に示すように習得の早い段階では「母語干渉 (負の転移)」が優勢で「発達を促す習得プロセス」の出現を妨げる。そして、時間が経つにつれて「母語干渉 (負の転移)」が徐々に減少し、次第に「発達を促す習得プロセス」が優勢になる。その後これらの出現頻度は減少し、やがて第 2 言語の獲得が終了する。しかし、学習者によっては母語話者の領域 (図の右端) に達することができず、その手前で化石化してしまう。一方、優秀な学習者は早く母語話者の領域に到達する。このモデルについて、Major 自身も上記に示したポルトガル語を母語とする英語学習者の発話データをもとに検証した結果、この発達過程のモデルは妥当であるとの結論を下している。

なお、Major (1987) のモデルは、図 2 のように発話スタイルが casual、normal、formal によって、「母語干渉 (負の転移)」や「発達上を促す習得プロセス」の出現する頻度が異なってくることも示している。発話スタイルが casual から formal へ移行するにつれて、「母語干渉 (負の転移)」が減少する一方で「発達上を促す習得プロセス」が優勢になり、やがて徐々に減少する。この点も、ブラジルのポルトガル語話者による英語学習の発話データを検証し、このモデルの妥当性を支持している。

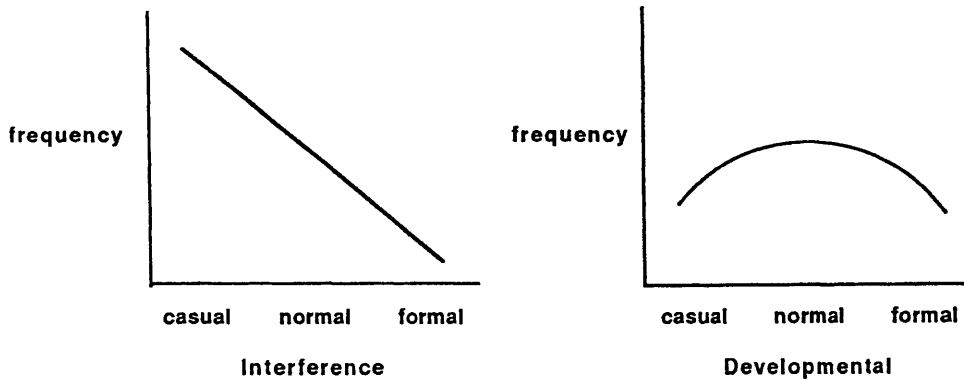


図 2. Relationship of interference and developmental processes to style (Major1987 : 107)

第 2 言語習得のモデルは多くのデータに対し応用できるものでなければならない。従って、中間言語を発達させる「習得プロセス」に注目して、「母語からの干渉（負の転移）」と共に「正の転移」がどの程度顕著に現れ、どのように他の「習得プロセス」と相互に影響し合うのかを検証していくことは重要である。また、Tarone が示した「習得プロセス」の他にも異なった「習得プロセス」が存在するか、対象とする音声によって「習得プロセス」の出現の仕方が異なるのかを調べるとともに、有標性の理論との関わりや発話と知覚における「習得プロセス」の違いについても見ていく必要がある。

4. 破裂音の研究成果に見られる中間言語を構築する「習得プロセス」

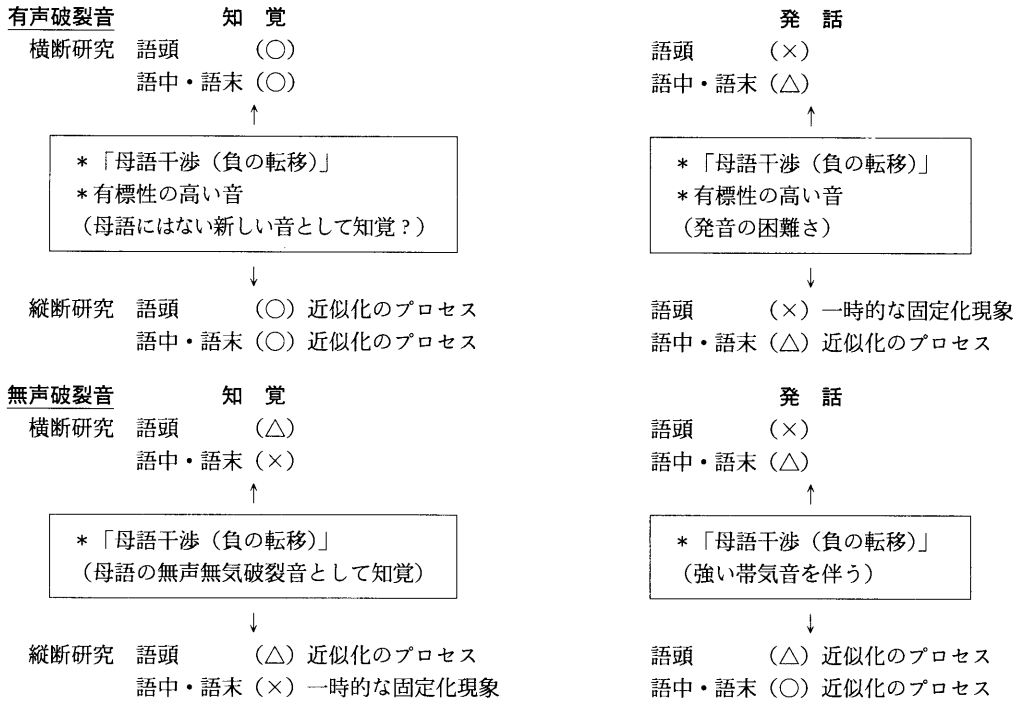
本研究では、中国人学習者を対象とした福岡（1995a、1995b）の破裂音に関する習得研究の結果が、第 3 節で述べた Major（1987）の言語習得モデルにあてはまるかどうかを検証し、表 1 にまとめた。

福岡（1995a、1995b）の破裂音の研究では、北京方言には有声破裂音がなく上海方言には有声破裂音があるという、方言における有声破裂音の有無の違いにより、同じ中国人学習者の間でも習得に違いがあることを指摘した。北京方言話者には「母語干渉（負の転移）」が、上海方言話者には「正の転移」による「習得プロセス」が観察されるものであった。さらに、一部の北京方言話者には、不正確な言語的特徴が持続し、一時的に習得が停止する「固定化現象」(stabilization) が出現した。しかし、これらの学習者を除きその他の学習者は、日本語の有声・無声破裂音の正聴率が上昇し、日本語母語話者の破裂音の VOT 値へと学習者の VOT 値が推移していくなど、目標言語である日本語の破裂音の音体系に向かって近づいていく「近似化」の「習得プロセス」が、中国人学習者の間に共通して見られた。VOT 値の習得結果に関しては、Flege（1980）のアラビア人英語学習者の

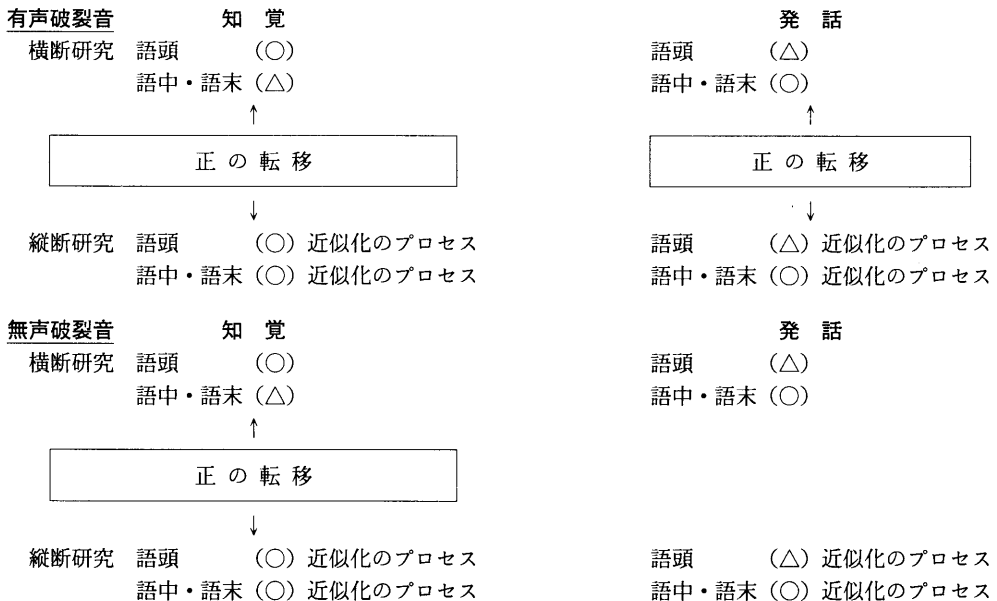
表 1. 破裂音の習得研究における中間言語を構築する「習得プロセス」

(○×△は、福岡 (1995a、1995b) における北京・上海方言出身の日本語学習者の有声・無声破裂音の正聴率、および VOT 値の結果から判断した総合的な習得度である。)

●北京方言話者 (*で示した個々の現象等は、Major (1987) のモデルでは十分に説明できない。)



●上海方言話者



研究を支持できるものであった。即ち、本研究においても、VOT 値が音響的に母語音と第2言語音の中間音を発し、徐々に第2言語音の基準に近づいていく「近似化」の「習得プロセス」が観察された。

しかし、有声破裂音のない北京方言話者において、「母語干渉（負の転移）」が減少することなくそのまま「固定化現象」に向かう現象が現れ、Major (1987) のモデルでは部分的に説明できない点が生じた。北京方言話者の「母語干渉（負の転移）」による「固定化現象」を図示するならば、図1のMajorのモデルのように「母語干渉（負の転移）」と時間との関係を直線的な下降の線で示されるのではなく、図4のように習得が進む中で一時的に水平状態が保たれた“A”の状態の存在が想定されるのである。即ち、習得は常に一定の速さで進むことはないので、習得状況が一時的に停止した状態もあれば、急激に進む場合など様々な状況が考えられる。もっとも、Majorのモデルは習得期間が提示されていないため、この「固定化現象」を長期の習得期間で考えるならば、Majorが示す通り直線でも可能となる。いずれにせよ、Majorのモデルは、北京方言話者に見られるような個々の現象や個人差などを全て説明しようとするには限界があり、部分的に応用しにくい点がある。

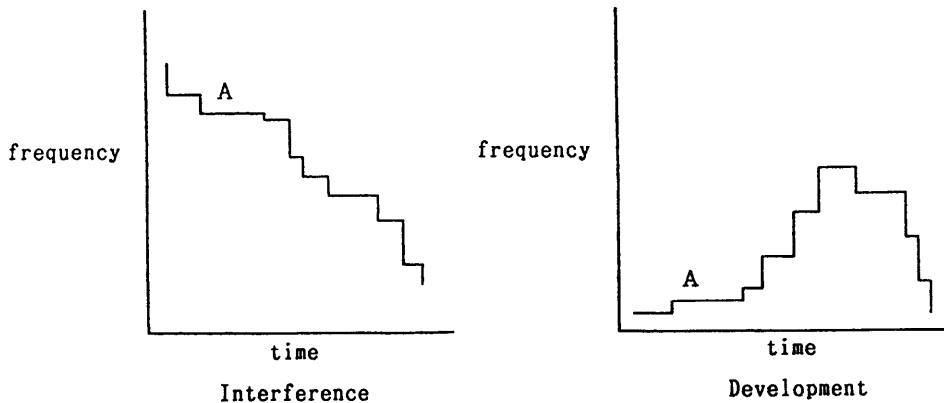


図4. Major (1987) のモデル上で示した北京方言話者の「固定化現象」

ところで、永続的な化石化は修復不可能だが、一時的な固定化は習得が固定化した状態から抜け出して習得が進むと考えられている。これらの違いは、時系列上の違いであることも考えられる。しかし、一時的な固定化はその固定化している要因が取り除かれなければ、化石化となってしまう可能性が高い。特に母語にはない有標性の高い言語要素ほど、化石化する可能性が高いと思われる。「永続的な化石化」と「一時的な固定化」との違いは、2言語間の言語要素の差によるところが大きいのではないかとと思われる。

本研究で観察された「母語干渉（負の転移）」と「近似化」による「習得プロセス」が、

中国人学習者だけに現れるものなのか、他の外国人日本語学習者にも見られる共通した「習得プロセス」であるかについては、同じ指導方法を講ずることが可能となるので、今後さらに調べる必要がある。

5. まとめと今後の課題

第 2 言語学習者が目標言語を学んでいく際に、個々の音声においても様々な習得のプロセスを使って中間言語を構築させていく過程を、福岡 (1995a, 1995b) の研究成果より示すことができた。「母語干渉 (負の転移)」や「正の転移」など、方言の違いによって母語からの「習得プロセス」の出現の仕方が異なる一方で、「近似化」など学習者に共通する「習得プロセス」が観察された。これらの「習得プロセス」が相互に影響しあって習得が進む過程について、Major (1987) の言語習得モデルに照らし合わせて検証を行なった結果、習得が進むに従って「母語干渉 (負の転移)」は減少されるものの、その発達の度合いは一定の速度で進むわけではなく、一時的な停止状態や加速度的に進む場合など様々な現象が見られ、Major の第 2 言語習得モデルにあてはめて考えられない習得状況の存在を指摘することができた。

日本語の音声の習得において、学習者はいかに中間言語を構築していくか、今後も「母語干渉 (負の転移)」とその他の様々な「習得プロセス」との相互作用に注目しつつ、研究と分析を行っていきたい。

注

1. 本研究は、福岡 (1999) の第 1 章と第 6 章の一部に加筆修正したものである。
2. 中間言語音韻論の研究成果については、Ioup, G. and Weinberger S. H. (1987) *Interlanguage phonology* を参照。
3. 音声・音韻における第 2 言語習得研究を概観した論文には、Tarone, E. (1978 [1987]), Flege, J. E. (1992b)、Young-Scholten, M. (1993)、関屋 (1994) がある。ここでは、主に Tarone が指摘した第 2 言語習得研究を中心に 4 論文からまとめた。
4. Ellis, R. (1994 : 30-35) の *Cognitive accounts of second language acquisition* を参照。
5. Richards, J. (1971b), Dulay and Burt (1973), Wode, H. (1976)。音声に関しては Tarone, E. (1978 [1987 : 80]), Ioup G. and Weinberger S. H. (1987 : Xii, 418)。

参考文献

- 関屋康 (1994) 「第 3 章 音韻の習得」『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店 [東京], 49-69.
- 福岡昌子 (1995a) 「北京語母語話者と上海語母語話者を対象とした日本語の有声・無声破裂音の横断的習得研究」『言語と日本語教育-水谷信子先生退官記念号』9, 日本言語文化学会, 凡人社, 201-215.

- 福岡昌子 (1995b) 「北京語・上海語を母語とする日本語学習者の有声・無声破裂音の横断的および縦断的習得研究」『日本語教育』87, 日本語教育学会, 40-53.
- 福岡昌子 (1999) 「中国人学習者の日本語音声の習得及びその指導に関する研究—破裂音とイントネーションを中心として—」人文科学博士学位取得論文, お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻.
- Akabane-Yamada, R. (1996) "Learning non-native speech contrasts: What laboratory training studies tell us", *ASA and ASJ third joint meeting, Acoustic Society Japan Proceeding*, 953-958.
- Backman, N. (1977) "Intonation problems of eight Spanish-speaking adults learning English", Ph.D. dissertation, Boston University.
- Best, C. T. (1995) "A direct realist view of cross-language speech research", *Speech perception and linguistic experience: theoretical and methodological issues*, W. Strange (editor), Timonium, MD: York Press, 171-204.
- Bohn, O. and Flege, J. E. (1990) "Interlingual identification and the role of foreign language experience in L2 vowel perception", *Applied Psycholinguistics*, 11, 3, 303-328.
- Brière, E. J. (1966) "An investigation of phonological interference", *Language*, 42, 4, 768-796.
- Celce-Murcia, M. (1977) "Phonological factors in vocabulary acquisition: a case study of a two-year-old English-French bilingual", *Working Papers in Bilingualism*, 13, 5, 27-41.
- Corder, S. (1967) "The significance of learner's errors", *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-169.
- Dickerson, L. (1974) "Internal and external patterning of phonological variability in the speech of Japanese learners of English: toward a theory of second language acquisition", Unpublished doctoral dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Dulay, H. and Burt, M. (1973) "Should we teach children syntax?", *Language Learning*, 23, 245-258.
- Dulay, H. and Burt, M. (1977) "Remarks on creativity in second language acquisition, In Burt, M., Dulay, H. and Finocchiaro, M. (eds.), *Viewpoints on English as a Second Language*, New York: Regents, 95-126.
- Eckman F. R. (1977) "Markedness and the CA hypothesis", *Language Learning*, 27, 2, 315-330, [Reprinted in Ioup, G. and Weinberger, S. H. (eds.) 1987, 55-69.]
- Eckman, F. R. (1981) "On predicting phonological difficulty in second language acquisition", *Studies in Second Language Acquisition*, 4, 1, 18-30.
- Ellis, R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition*, Oxford University Press.
- Flege, J. E. (1980) "Phonetic approximation in second language acquisition", *Language Learning*, 30, 1, 117-134.
- Flege, J. E. (1989b) "Chinese subjects' perception of the word-final English /t/-/d/ contrast: Performance before and after training", *Journal of the Acoustical Society of America*, 86, 1684-1697.
- Flege, J. E. (1992b) "Speech learning in a second language", *Phonological development, models, research, and applications*, C. Ferguson, L. Menn & C. Stoel-Gammon (eds.), Parkton, MD: York Press, 565-604.
- Flege, J. E. (1995) "Second-language speech learning: findings, and problems", *Speech perception and linguistic experience: theoretical and methodological issues*, W. Strange (editor), Timonium, MD: York Press. 233-273.
- Flege, J. E. and Eefting, W. (1986) "Linguistic and developmental effects on the production and

- perception of stop consonants”, *Phonetica*, 43, 155–171.
- Flege, J.E. and Bohn O. (1989) “An instrumental study of vowel reduction and stress placement in Spanish-accented English”, *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 35–62.
- Ioup G. and Weinberger, S. H. (eds.) (1987) *Interlanguage phonology: the acquisition of a second language sound system*, Cambridge, MA: Newbury House.
- Johansson, F. A. (1973) *Immigrant swedish phonology: A study in multiple contact analysis.*, Lund/Sweden: CWK Gleerup.
- Lisker, L. and Abramson A. S. (1964) “A cross-language study of voicing in initial stops: acoustical measurements”, *Word*, 20, 384–422.
- Major, R. C. (1987) “A model for interlanguage phonology”, *Interlanguage phonology: the acquisition of a second language sound system*, Cambridge, MA: Newbury House, 101–124.
- Miyawaki, K., Strange, W., Verbrugge, R., Liberman, A. M., Jenkins, J. J., and Fujimura, O. (1975) “An effect of linguistic experience: the discrimination of [r] and [l] by native speakers of Japanese and English”, *Perception and Psychophysics*, 18, 5, 331–340.
- Nemser, W. (1971) “Approximative systems of foreign language learners”, *International Review of Applied Linguistics IX*, 115–123.
- Richards, J. (1971b) “A non-contrastive approach to error analysis”, *English Language Teaching Journal*, 25, 204–219.
- Schachter, J. and Celce-Murcia, M. (1977) “Some reservations concerning error analysis”, *TESOL Quarterly*, 11, 441–451.
- Schmidt, R. (1977) “Sociolinguistic variation and language transfer in phonology”, *Working Papers in Bilingualism*, 12, 79–95. (Reprinted in Ioup, G. and Weinberger, S. H. (eds.) 1987, 365–377.)
- Selinker, L. (1972) “Interlanguage”, *International Review of Applied Linguistics*, 10, 209–231.
- Selinker, S. & Lamendella, J. (1979) “The role of extrinsic feedback in interlanguage fossilization: A discussion of rule fossilization: A tentative model”, *Language Learning*, 29, 363–375.
- Tarone, E. (1972) “A suggested unit for interlingual identification in pronunciation”, *TESOL Quarterly* 6, 4, 325–333.
- Tarone, E. (1976) “Some influences on interlanguage phonology”, *Working Papers in Bilingualism* 8, 2, 87–111.
- Tarone, E. (1978) “The phonology of interlanguage”, In *Understanding second and foreign language learning*, Rowley, MA: Newbury House (Reprinted in Ioup G. and Weinberger, S. H. (eds.) 1987, 70–85.)
- Tarone, E. (1988) *Variation in Interlanguage*, London: Edward Arnold.
- Wode, H. (1976) “Developmental sequences in naturalistic second language acquisition”, *Working Papers in Bilingualism*, 11, 8, 1–31.
- Young-Scholten, M. (eds.) (1993) *The Acquisition of Prosodic Structure in a Second Language*, Max Niemeyer Verlag.